

文樂評切拔帳 (四月)

四月の文樂座

山口 廣 一

晴れの應召、應役で文樂の人影陣も手不足を加へて来たが、このため古參級の紋太郎あたりが紋十郎の足に超つてゐるなどはいささかこれは悲劇で、同情に値する、それになほ無理な配役、例へば晝の部の「廿四孝三段目」で見せた榮三郎のお種など、如何にも大役に過ぎて動きがとれてない、缺員を實質で補ふ意氣で一層の勉強を望みたいものである。

この「廿四孝」では、つばめ太夫の「桔梗ヶ原」がしつくりとした語り口で頼もしく、七五三太夫の「下駄の段」も悪くないが景勝の入りがもう少し鮮明でありたく、切の住太夫の「物語」は迫力が足りず所詮はこの人の語り物でない。

夜の部では古輶が「新口村」を出してゐるが、道行物の艶を獨自の語り口で燦すやうに

消して孫右衛門の人物描出に重點をおき、それを切々たる抒情味のうちに溶け込ませて行く、この語り物をこれだけの藝格と内容で聞かせたのはさすがである、人形も榮三の孫右衛門、紋十郎の梅川、龜松の忠兵衛いづれも古輶の語り口とよき諧調を見せてゐるが特に紋十郎の梅川の哀愁を探りたい——毎日新聞

競演廿四孝

新口の水墨畫味

西尾 福三郎

畫評 禍も三年経ては福とか、燈管で夜歩き不自由の折柄俄然畫興行に客足が寄る。この機曾に折角當事者のよりよき吟味と練演を望む。「廿四孝」の通しと云つても辛々三四段目のかいつまみだが物がよいので趣向本位の半二作品のパラレリズムを味はふのによい。作が並行主義だから太夫も人形も併列で見せ

てゐる。即ち勸助住家は犬唄で主として慈悲藏を語り、物語りの條りの横威は住太夫、この二つが晝のシンで競演氣味、何れも相當の出来だが大隅の損の卦、他では濱太夫の二人彈正がよい。人形は慈悲藏と八重垣姫を龜松と光造の交代、お種と勝頼が榮三郎でこれも花形三人の競演で各競演意識あつてか自重力演してゐる。おしなべて優ではないが佳でもなく良か良上と云つた所、他に政龜の越路、小兵吉の唐織、門造の景勝以上をワキ役三秀とする。

夜評 古輶の新口村は愈々手なれて頓に枯淡の凡韻が加つてきた。本來道行き風のこの場は繪ならば水彩の趣だがいぶしがかゝつて水墨畫の味に近い。殊に孫右衛門の味が榮三の人形と相俟つてその感が強く、清六の絃にもそれを感じる。これに比せば阿古屋は絢彩色の版畫だがこれは觀西翁の音彩に爆られてグツと賑やかな色感が盛上つてゐる。あの高齡であの意氣あの艶は偉とすべしだ。新左衛門の歿後だけに艶物彈きのこの人の絃に期待する點が多い。たゞ阿古屋の愛ひがあの絃に出てゐるか何うか岩永ならぬ筆者の疑問だ。相生の岩永がよく、他では織太夫の重の井子

別れ後半をとる。新作佐藤兄弟の妻は演出の結果をみると佐藤兄弟の母である。題意の通り嗣信、忠信の妻をもつと生かしてこの二人が夫の幻として母の前に立つ條りを主に幽幻な味を出した方がよかつた。新作にしては文章の調子が古い——讀賣報知

古靴の「戀飛脚」ほか

文樂夜の部第一は新作「佐藤兄弟の妻」橋本關雪齋伯の原作を例によつて西亭氏が脚色作曲したもので上品な作品にはなつてゐるが曲に相變らず長唄調が多いのが堅苦しく、それに物語の主題が鮮明でないで佐藤兄弟の妻々々やら母々々やらわからなくなつてゐるのが瑕である。

第二「戀女房染分手綱」ク道中双六々は源宮の浮瑠璃に無關心と思へる程人形が勝手に双六をしてゐる、兩者別々の舞臺が珍しく面白いク子別れの縁はうまいが先月ほどの感銘がない。七五三同様上連組の一人である縁に技巧のみに捉はれることを注意したい、人形では文五郎重の井と紋司の三吉がいきの合った舞臺を見せ生別の悲嘆を十分表現する。

第三「戀飛脚大和往來」新口村は古靴で久

し振りに紋下の貫祿を示して壓巻「落人のためかや」の語り出しが素ばらしく巧くこの段の主題をはつきりと語つてさうした雰囲気構成後に事件へ入つて行き忠兵衛、梅川、孫右衛門を語り分け三人を絡み合はせて義理と情愛の深刻な對立を語る其上古靴獨得の技巧がよい哀愁を添加して精彩を放つ「覺悟秘めて名乗つて出い」この邊り盛上る情愛の高潮が強く迫り胸を壓す清六の絃も久し振りに精彩を放ち餘韻ありてよく榮三の孫右衛門は滄い光澤と藝格の正しきで立派但し幕切れで屋臺を下手へ引き上手の雪景色を廣く見せ路傍の石に腰を下して羽織を頭からひつかむるが昨年四月の玉藏は屋臺を上手へ引き下手を廣く見せ番傘をさして落ち行く二人を觀せ、つと傘をすばめて頭からかむる演出であつた、兩者を比較してここは玉藏の演出の方が廣い世間に只獨りぼつちになつた老人の言語に絶した淋しさを表現してよい。

第四「壇浦兜軍記」ク翠實々は伊達、相生長尾、文字の掛合ひながら平凡で精彩に缺く久し振りに出演の觀西翁が老齡にかかはらず元氣一杯、その柔らか味と潤ひのある美しく艶やかな絃に敬意を表す、人形では紋十郎得

意の阿古屋だけに優美で艶麗、特に琴、胡弓を弾く邊りの纖細さは一般の喝采を博し太夫を食つてしまつた恰好——大阪新聞

關西劇信の一節

升屋治三郎

四月の文樂は晝は「本朝廿四孝」桔梗ヶ原より奥庭狐火迄の通し狂言、この通し狂言は度々上演されたもので大して珍しいものではない。太夫は「勸助物語の段」の住太夫が優秀人形は龜松が奥庭の八重垣姫の早替りを使つて先づ瓊瑤なく鮮な處を見せてゐる。夜は新作「佐藤兄弟の妻」と重の井子別れ、新口村、阿古屋。

新作「佐藤兄弟の妻」は橋南路の「東西遊記」の甲冑堂の件を畑連ひの橋本關雪齋伯が脚色したのを例の西亭が浮曲化したもので内容が時局感情にふさはしく、ものが時代ものだから人形芝居に適當なのだが、然しかうした完成を誇る文樂に於てはまだ優越な作品とは云ひ難い。

紋下の古靴が新口村を語つてゐるが、もう一つ氣勢が揚がらないのに反し、織太夫の重

の井子別れは今日は晝夜を通じて逸品である

文 樂 座

筒 井 有

人形淨瑠璃は大衆的でないだけに税金がきく、御馳走やお土産のない今日客を連れて來さうにも思ふが陽氣と共に客足は薄くなる。

東京で浪花名物人形淨瑠璃の自由販賣に客がつく。第一佐藤兄弟の妻橋本關雪原作西亭脚色作曲といふ新作で遅れて中道から見たが母が相生・嗣信妻が綾・忠信妻が伊達と精銳すぐつての掛合で餘り癖のない人達だから新作にありがちなギョチさがない。人形光造の兄嫁は榮三郎の弟嫁と共に兄弟戦死を物語る演技に一日の長があつた。それも榮三の母が老人のさびた聲には抗すべくもなく總員一幕の努力を洩はれた。

第二戀女房染分手綱、源太夫の双六は節廻しは良いが女義のやうに腕を動かすのはシャーンと構えて欲しい。織太夫の切、子別れは中堅のうまさを感じさせた。「現在我が子に馬追させ」の嘆き無類の情を見せたが一段としては引きつける力がまだ弱い。人形紋十郎の重

の井は文五郎の代役だが「見れば見る程よい子ぢやに馬方させる親の身は」と大家のお乳の人らしい品位があつた。幕切に鏡を出して三吉を寫し見る型は初めは涙を陰くす爲めだから鏡を高々と上げるのはどうかと思ふ。

紋司の三吉は子供だけに遣ひよい點もあるが意外によく「馬方すれども伊達の興作の惣領ぢや母様でもない人に」と金を投げるところは太夫とピッタリ合つて涙を絞らせた。第三戀飛脚新口村は古靨が風邪氣味か調子が低くいが一言一句をおろそかにせぬ情味ある對話の妙技に引きつけられた。人形龜松の忠兵衛か紋十郎の梅川より良く見えた程に梅川に廓の人と隠されぬ色香がなかつた。榮三の孫右衛門は倒れて梅川に介抱されながら不審さうに見るのが表情の出ぬ人形の顔に出るやうに見せた。面ないをして忠兵衛と手を取り合ふ時梅川が手拭を取つたが、自分で手拭を上げて見る型よりはよいが、見ない折から開ゆる多くの人音で慌てゝ面ないを取つて忠兵衛を見るのが本行である。第四阿古屋翠實は第一と同じ掛合で相生の重忠・伊達の阿古屋で氣の變らずモウヨイ、三味線やめと言ひ度くなが、胡弓がすめば三曲の寶道具の説明もな

くスグに舞臺を三下りとなるのは女義太夫の放送と違ひ文樂座が之ではと驚く。此頃の観客層が變つて各劇場とも野次も飛びやかましが文樂座はシンミリと聴けるのに出演者が驅足鍛鍊では困る。——寶塚文藝圖書館月報

人形覺書「合邦」 四七頁よりつゞく

「父は常々勤進の自力、他力に此の佛體」で下手に向いて戸外の閻魔の像を右手で指差し「建立して我が住家を其儘一字の辻堂に」上を見上げ「誓むも亦、平等利益」となつて、合の手で右の手に鈴をとつて屋體を出て「東門中心極樂へ娘を往生なし給へ」と閻魔の像の前に踞いて鈴を振り「佛法最初の天王寺」で禮拜をして立上り船底へおりて「合邦が辻と」でトン／＼と玉手の死骸の伏した櫃の前に膝をついて合掌する。

以上の記録は昭和十七年三月文樂座上演による。中、竹本源太夫、鶴澤叶太郎、切、豊竹古靨太夫、鶴澤清六。人形は合邦、吉田榮三（左手、吉田光之助、足、門次）玉手御前——吉田文五郎、合邦女房——桐竹政龜、淺香姫——桐竹龜松、俊徳丸——吉田玉幸、奴入平——吉田玉徳等で總て黒衣であつた。